

輯製二十万分一図

昔から地図を見るのが好きだ。名古屋・大阪・東京などの古地図コピーを丸善でよく買ったものだ。地図を見ているだけで、人びとの暮らし、歴史などが浮かんでくる。

写真は岐阜県の輯製二十万分一図復刻版である。地図の真ん中に先にレポートした「黒川」、その左上に「白山」(高山線下油井)の名前が見える。この地図の解説から。

「輯製二十万分一図は、明治初期における日本の代表的な地図の一つである。この地図の製作は明治 17 年(1884)、日本では正式測量がようやく緒についたばかりの時期に、参謀本部陸軍部



測量局(後の陸地測量部)によって着手された。当時あった伊能忠敬の地図は、陸地の輪郭と主要街道だけであり、幕府の国絵図は村の位置と距離が主な表現であって、そのままでは使用に耐えないものであった。

輯製二十万分一図はその名称の通り、これらの地図とそれまでに内務省地理局・地質調査所・海軍水路部などで作成された地図を資料として編輯、製作されたもので、地形表現はプロシアの 10 万分 1 図にならい、うんのう(ケバ)を用いている。全国の刊行は明治 19 年から 24 年(北海道は 24 年から 26 年)までという驚くべき速さで行われ、このことから当時の中縮尺の日本全域図に対する要求の強さがしのばれる。

この地図が物資の調達や宿泊の可能を知ることが急務としたことは、村落表現(宿駅・村落の区別や人口別表示)などからも読みとることができる。正式地形図から編纂された 20 万分 1 帝国図の完成と共に廃止されていたが、昭和 36 年まで一部その姿を変えて生き永らえていた。内容的には、資料の疎密がそのまま表現されてはいるが、幕末から明治初頭の空間的なひろがりや、全国的にうかがい知ることのできる唯一無二の資料として、きわめて貴重な地図である。

(2017 年 8 月 23 日)